

授業での活用 家庭学習での活用 パフォーマンステストでの活用 小学校 中学校 高等学校

実践のポイント デジタル技術を活用した、個別最適な学びの実現による言語活動の充実に向けて

実践前

- 児童生徒の、目的・場面・状況に応じて話せるコミュニケーション力を高めたい
- 一人一人の発話を評価するのが大変
- 学習状況に応じた課題の設定が困難



実践後

- 教師から児童生徒への、より効果的な声かけやフィードバックの充実
- AIを活用した一斉テストによる効率化
- 児童生徒の学習意欲の向上

実践内容

- 実証校数：10校（小学校：3校、中学校：3校、義務教育学校：1校、高等学校：3校）
- 対象人数：5,310名（小学校：740名、中学校：2,050名、高等学校：2,520名）
- 対象学年：小学校：第5、6学年、中学校：第1～3学年、高等学校：第1～3学年
- アプリ等：BASE in OSAKA（AIを搭載したデジタル英語学習ツール。英語の発話に対するAI自動採点が可能。）
- 研究内容：デジタル技術の効果的な活用の在り方や指導改善等について
 - ・BASE in OSAKA（以下、AI）を活用したスピーキングやリーディング等のパフォーマンステストの実施
 - ・児童生徒、教師アンケートの実施
 - ・対人でコミュニケーションを行う前の練習等で、AIを活用
 - ・授業や家庭学習における、AIの活用の在り方や指導改善等についての実践

「AIの効果的な活用」と「教師の役割の変化」

◆ パフォーマンステストにおける活用

AIが評価を行う1回10分程度のスピーキングやリーディング等の、児童生徒の英語力を測るパフォーマンステストを年間3回実施した。

これまでは、一人一人に対してテストを実施する時間の確保が必要であったが、AIを活用することで一斉に実施できるため、テスト実施後の指導に時間をかけられ、より効率的に、かつ丁寧な指導ができる。



◆ 授業・家庭学習における活用

児童生徒は、教師から端末を通して配信された英語のスピーキング等の課題や、自らの学習状況に応じて選択した問題に取り組んだ。ペアトークなど、人と英語でやり取りをする前の練習として活用した。

AIを、人とのコミュニケーションに向けた表現等の練習のためのツールとして位置付けることで、言語活動を行いながら必要な練習を行うことができ、言語活動の充実につなげることができる。

ここが落とし穴！「AIの活用」と「教師の役割」

◆ AIを活用したスピーキング練習での留意点

AIを活用したスピーキング練習の中で、AIからの評価を高めることのみが目的になってしまったり、発話内容よりも発音の精度や流暢性を高めることが優先され、漠然と同じような発話内容や言語形式を使って発話しているだけになってしまったりする状況もしばしば見られた

AIの活用自体が目的とならないよう、ツールはあくまでも実際に人と英語でコミュニケーションを取れるようになるための手段の一つという意識を、教員と児童生徒が共有しながら活用を進める必要がある。

成果検証

◆ 児童生徒の英語力

AIを活用して、英語でのスピーキングに慣れることや語彙力のアップ等に継続的に取り組んだ結果、各校種で英語力の向上が見られた。

AI評価 (平均点)	検証初期 (5月)	検証終期 (1月)
小学校	22.2	28.6
中学校	35.5	36.2
高等学校	25.4	41.4

※100点満点

注：当該AIに搭載した、1回10分間程度のスピーキングを中心とした英語力を測るテストにより測定（AIが発音の精度や流暢性等をもとに英語力を数値化）

◆ 児童生徒の関心・意欲

アンケート項目「AIを利用した英語でのやり取りを行ってみて、もっと英語で話せるようになっていたと思いませんか」における肯定的回答割合が、高い数値での推移が見られた。

アンケート結果	第2回（10月）	第3回（1月）
肯定的回答（%）	71.1	72.1

◆ 教師の指導

80%以上の教師が「AIの活用により児童生徒を励ます具体的な声かけが増えましたか」という質問に対して、「増えた」と回答している。AIが教師の見取りを補助したり、ツールを通して児童生徒の個別の学習状況が把握できたりすることで、学習内容に対するフィードバックの充実やより効果的な声かけにつなげていくことができた。